



國分 功一郎 「中動態の世界 一意志と責任の考古学」

秋田県教育カウンセラー協会事務局 木村 留衣子

※太字は書籍引用箇所

強制はないが自発的でもなく、自発的ではないが同意している。そうした事態は十分に考えられる。というか、そうした事態は日常にあふれている。

教員として、個人の評価はするほうもされるほうもしっくりこなかった。仕事や様々な活動は、一人の働きで達成できるものではない。100%全力真面目な集団の中では、適当でいいよ、というゆるさを持つ（そして往々にしてつつこまれやすい）あまりできなさそうな一人が集団の働きやすさやパフォーマンスに与える効果は評価されにくい。また、働きアリの法則のように、同じ人であっても、天候その他の環境でもメンバー構成でも働きは変わる。チームで働く場合、物理的条件が整った場合、何かを成したとして、その功績を個々人の行為に基づくと分けることはできるのか。

われわれは自分が持って生まれたものゆえ、あるいは生きてきた時間の重みゆえに、あるいは他の人々とつくり上げる関係のゆえに、自由ではいられない。それは、すべては相互関係の中で生じるという仏の教えのようでもあり、一方で、すべては神がつくった一つの世界の内にあるようでもある。本書はインドヨーロッパ諸語だけでなく日本語の歴史にも触れているが、中動態は特定の言語下だけに見られた文法ではなく、主語ありきの構文こそ新しい。受動と能動の対立は普遍的なものではなかった。あると思い込んでいる「意志」、そして意志と責任の関係。あらゆる行為を能動と受動と分類できると思い込んでいるのも、普遍的ではない能動態と受動態の区別が学校で教えられるがゆえであるという。私たちの思考の可能性は、用いる言語に規定されることを免れない。

最近の日本社会は、自己責任だとか自助努力だとか、何かと生きづらい。確かに現在の言語や法は、中動態を前提としていない。しかし、能動と受動をグラデーションのようにとらえ、自分と他人あるいは自然環境との間について、近代的な個人観にとらわれるのではなく、少し柔軟に考えることは可能だろう。

中動態の世界で生きている私たちは、完全に自由でも完全に強制されてもおらず、自由と強制の間をいったりきたりしているという。自身がどのような外的刺激でどのように変容するかを認識することで、自由に近づくことができる。この考え方は、そもそも不確かな「意志」なるものが弱いと言い訳しがちな私にとって、優しくも厳しくもあり、身を正すやすがになっている。

國分功一郎氏

「意志そして責任についてすこし変わった観点から論じているのがこの本です。中動態というのはかつて存在した、能動態でも受動態でもない文法事項のことなのですが、この文法を出発点に、意志や責任、さらには人間の自由まで論じています。あまり見慣れないものを扱っているわけですが、平易に書かれています。世界の見方が変わるはずです！」（「看護師のための Web マガジン by 医学書院」より）

〈補足情報：「私の一冊」担当〉